

「公爵令嬢リリア・エスメラルダ！貴様には、隣国の皇子おうじを誘惑し、国を傾けようとした疑いがかかっている！」

王城の大広間。

私は腕をくぐられて、床に膝をついて座らされていた。

突きつけられるのは覚えのない罪。

私のせいで、隣国の皇子が婚約者との仲を違え、この国にやってこようとしているらしい。

そんなの知らない。

隣国の皇子と会ったことはあるけれど、誘惑なんて断じてしていない。

皇子は私への愛を声高に語っているらしいけれど、私からすればそんなの皇子が勝手に言っているだけだ。

愛してくれなんて頼んでない。そんなの知らない！

私の叫びは聞き入れられず、国王が私に指を突きつけた。

「貴様を国家追放の刑に処す！ 執行は三日後、それまで牢に入れておけ！」

大広間に、無情な宣言が響きわたった。

私は知らない兵士に乱雑に腕を引かれ、薄暗い牢屋に手錠で繋がれた。

それから二日。

私は牢の中で、絶望の時間を過ごしていた。

明日になれば、私は国を追い出されてしまう。亡命のために行く場所なんてない。

お金も地位もなくして世に放り出されたら、その先にあるのは破滅だけ。

暗く塞ぎ込んだ心で、ぼんやりとベッドの上で過ごしていたところに、一人の騎士が訪れた。

「リリア様。ひどいお姿ですね」

「アルト……」

現れたのはアルトという騎士だ。子犬のようなふわふわの金髪が、薄暗い牢の中でも明るく光っている。

彼は牢の鍵を開けてリリアの寝転ぶ硬いベッドに近づく。そして、くりっとした大きな目を細めて、口角をきゅっとあげてリリアに笑いかけた。

……可愛らしい見た目とは裏腹に、若くして騎士団長に登りつめた実力と地位のある男だ。

私にとっては幼少の頃からの友人でもある。

「……何しにきたの？」

私は最低限の威厳を保って、声がかすれないように体を起こして問いかける。
両手を縛る手錠がジャラリと鳴った。それを見てアルトは労わるような優しい
顔に表情を変えた。

「リリア様が隣国の皇子をたぶらかしたなんて、信じられなくて……」

アルトは優しい手つきで手錠のはめられた私の手首を撫でる。

三日前より細くなった気がする手首に、触れるあたたかな感触がくすぐったい。

アルトなら、私が無実であると信じてくれるかもしれない。私をここから助け
出してくれるかもしれない。

私は一筋の希望にすぎるように、アルトに語りかけた。

「違うの、アルト。私、誘惑なんてしてない……！何も心当たりがないの！」

アルトは驚いたように目を見開いて、それから視線を合わせるように、私の枕元にひざまずいた。

「じゃああなたはやっぱり、皇子のことなんて好きじゃないんですね？」

「ええ」

「それは大変でしたね……。でも、僕にはわかっていました。リリア様が僕以外の男をたぶらかすわけじゃないですよね？」

アルトの手が今度は私の頬を撫でる。まるで愛おしいものに触れるかのような優しい手つきとは反対に、アルトの声はさっきまでより低くなっていた。

彼の雰囲気が変わったのを感じ取り、私は少し体を後ろに引く。

「ど、どうしたの、アルト……」

「ほら、本当に好きな男の名前を言ってみてください」

「何を言ってるの、？」

アルトの目がまっすぐに私の目を射抜く。その瞳に光はなかった。

不穏な空気から逃げようと目を逸らしたのが、アルトには気に入らなかったらしい。

「まさかそれも、心当たりがないとか言うのですか？」

「何……きゃあっ!？」

アルトが立ち上がり、ベッドの上に上がってくる。安物の硬いベッドがギシギシと軋んで鳴った。

さすがの身体能力で、私の体は一瞬でベッドに縫い止められる。

「それなら、教えてあげないと」

「な、にを……」

冷や汗が私の背中を伝う。このままじゃダメだ、いけないことが起こってしまう。

そう思って私は手錠のかけられた手を必死に伸ばして、アルトの胸板を押す。しかし、鍛え抜かれた彼の体はびくともしない。

それどころか、私の手はあつという間に彼に捕まってしまった。

「これは取引です。僕の立場は知っているでしょう？ 僕の証言次第で、あなたは死刑にも無罪にもなる……」

「死刑——」

「大丈夫ですよ。上手に僕の言うことを聞いたら……ここから出してあげます」

それは先ほどまで私がそうとしていた希望のはずだった。けれど今は、助

けの来ない状況よりもずっと絶望的に聞こえた。

頭の上にあるベッドサイドの鉄柵に、手錠ごと手をくくりつけられる。

バンザイの姿勢で間抜けに動けなくなった私を見て、アルトは心底楽しそうに黒い笑みを浮かべた。

「ほら、返事は？」

答えれば屈辱、答えなければ——死ぬ。

アルトの放つ圧に負けて、私は震えながら頷くことしかできなかった。

「いい子ですね。それじゃまずは、服を脱ぎましょう？ 邪魔になってしまいますから」

「え……や、待って……!!」

アルトは私の服の下に手を入れる。牢に入るときに着せられたボロ着は頼りな

かった。

体をベッドに押し付けて逆らおうとする私をもともせず、アルトはあっという間に私から服をはぎとる。

「ああ——すみません、あちこち破れてしまいました。だけでもうこの服は着なくてよくなるから、かまいませんよね」

そう言って破れた衣服をこれ見よがしにベッドの外に放り捨てる。

残った下着も簡単に奪い取られ、抵抗むなく私は生まれたままの姿を晒すことになった。

両手は頭の上に固定されたまま。

体を隠すこともできない私の情けない姿を、アルトは上から下までじつくりと見つめる。

「や、やだ……見ないで……」

「どうしてです？こんなに綺麗なのに」

「恥ずかし……ひゃっ!!」

突然、アルトの手がお腹のあたりをつ……となでた。触れるか触れないかの微妙な刺激に反応して、背筋をぞくぞくっと何かが走る。

(変な声出ちゃった……恥ずかしいのにな……!!)

「こんなことで赤くなってたら最後までもちませんよ」

「最後って……」

「まずはそうだな……最初は、抵抗せずに我慢するところから始めましょうか？」

そう宣言して、アルトは私の胸元に顔を埋めた。

「っ……ふうっ、うっ♡」

ぴちゃ、ぴちゃ、と水音だけが牢屋に響く。

アルトの舌が、容赦なく私の胸の先をいじめていた。舐められていない方の胸も、彼の太い指先でぐり♡ぐちゅ♡と乳首をこねられている。

（しっこいのムリっ……気持ちよくなってるのバレないように、声抑えなきや……っ♡）

両手を拘束されている私は、唇を噛んで声をこらえるしかない。

なんとか快感の波をやりすごそうとしたが、目ざといアルトの前では意味がなかった。

じゅうつ♡とわざと音を立てて乳首から唇を離し、アルトはふっ♡と震える胸の先に息を吹きかけた。

その柔らかな唇から流れる熱い息に、私の体は思わずピクリと跳ねる。

「ふふ。見てください、乳首がこんなに大きくなってる。気持ちよかったですね」

「ちがう……っ♡」

熟れたピンク色の乳首がピンと主張しているのが、嫌でも目に入ってしまう。

自分の体とは思えないほど、アルトの唾液で濡れたそこはいやらしく光っていた。胸に触れるか触れないかの距離で動く彼の口元がじれったい。

そのまま、いたずらをするようにアルトは私の胸を両手でたゆん♡と揺らした。じれったい刺激に、つい背中を反らして胸を突き出してしまう。

（あ♡乳首以外のところ触られたら♡余計にうずいちゃうっ……♡）

すり……すり……♡とアルトの手が胸をじれったくなでる。乳輪の外側だけを

くるくるなぞったり、乳房を下から揉みしだいたり。

好き勝手触られている感覚はあるのに、先ほどまでの甘い刺激はやってこない。

「きもちいいですか？」

「っ」

（わかっててわざと聞いている……！でも、屈しちゃうダメよ、私。触ってほしいなんて、絶対……）

すりすり♡さわさわ♡胸を離れて脇やお腹まで、アルトはフェザータッチの範囲を広げる。

くすぐったくて、ぞわぞわとお腹の奥から熱いものが這い上がってきた。私は身をよじる。

「どこが気持ちいいですか？言ってみて？」

「やだ……っ、言わない……!」

「言うことが聞けないんですか?」

胸に戻ってきたアルトの指先が、わざと先っぽだけを避けて愛撫を続ける。

触れそうになる直前でスッと指が離れていくのを繰り返されて、生殺しの状況に背中が何度も反ってしまう。

「こんなに胸突き出してるのに、触ってほしくないんですか?」

「や、だ、言いたくない……っ」

「でも……言ったら、気持ちいいですよ?♡」

「は、あ♡」

すり♡とアルトの指が乳首すれすれをなぞる。

一瞬だけビリッと流れた電流のような快感と、アルトの甘い声。私の理性は白

旗をあげる。

「あ♡触って、ちくび♡ぎゅゝってされたい♡♡」

「こぅ？」

「あっ♡♡それ♡それすごい♡♡」

アルトの両手が私の左右の乳首を、上からつまんでぎゅゝゝ♡と引っ張る。
ばちばち♡と走る快感のままに、私は胸を突き出してアルトに体を押しつけた。

「びんびんの勃起乳首気持ちよくないわけなんですもんね♡ちゃんと教えてえら
いですよ♡」

「うゝゝ♡♡」

（恥ずかしいけど言い返せない……っ♡ちくびおっきくなって伸びちゃうっ♡

でもきもちい〜っ♡♡♡

「すごい感度。このまま胸だけでイケたりして。試してみます？」

「やだ、さわって、♡」

「もう触ってるでしょ？」

「ちがう……っ！」

とっくの前から私のおまんこはじゅわ……♡と熱く濡れている。
もじもじと膝をすり合わせながら、私は懇願した。

「下、さわって……っ♡」

「ふふ、すっかり淫乱になっちゃいましたね。仰せのままに、リリア様」

耳元で名前を呼ばれ、ちゅく♡と耳朶を口に含んで舐められる。

それと同時に、太ももから足の付け根までしゅるりといやらしい手つきが伸び

た。アルトの手がクリトリスまで届いて、先っぽをぴん♡と弾く。

「あんっ♡それきもちい♡」

「ここカリカリってされるの好きなんですか？かわいい」

「すき♡あ、だめ痛いの♡♡」

アルトの爪の先がクリの皮に引っかかって電撃のように痛みが走る。それで私の体はびくん♡と跳ねた。

（やばいつ、痛いの感じてるってバレたら……！♡ほら、爪でクリの皮ひっぱられてなすすべなく剥かれちゃってる♡♡）

「一番気持ちいいところ触ってあげますね♡」

「あゝっ!?!♡♡だめだめ、や、にゃあっ♡」

普段は皮をかぶって隠れているクリトリスの中心部を、にゅこ♡にゅこ♡と扱われる。

アルトの手がひとつ動くごとにびり♡びり♡とお腹の奥がしびれて、頭が甘いぼうっとした感覚に包まれる。

(頭、溶ける……っ♡何も考えられなくなっちゃうっ♡♡)

かくん、かくん、とクリをアルトの指に押し付けるように腰が動いてしまう。いつの間にか私のおまんこからは蜜があふれ出して、周りまでじっとりと濡れていた。アルトが指で入り口のあたりにつぶ……♡と触れて、愛液で指先を濡らす。

「このぬるぬるの指でクリ触ったら、どうなっちゃうと思います？」

つう……とおまんこの外側のぷよぷよした場所をアルトの指がたどる。普段は

急所を守るために閉じているソコは、今やアルトを簡単に受け入れて、快感を待っている。

（今その手でクリ触られたら♡ぬるぬる絶対きもちいい♡♡）

「んうゝ♡はやくう♡♡」

「はいはい。これじゃどっちが言うこと聞かされてるかわかりませんね？」

「おっ♡きたきたきたっ♡♡きもちいのきちゃうっ♡♡」

ぐりゅっ♡と濡れた指が大きくなったクリの先っぽを押しつぶす。

「えっちなお豆さん潰してあげます♡ほら♡」

「うゝっ……♡びりびりすごい♡♡おかしくなりゅっ♡♡」

「痛いのもちいいですか？ イっていいですよ？」

——ぐりぐり♡しこしこ♡ぬちゃぬちゃ♡

アルトの手の動きが早くなって、私は思い切り腰を反らす。

(きもちよすぎてわけわかんない♡♡なんかきたっ、すごい♡だめ♡♡)

「うあ♡♡あゝっ♡♡♡いくっ、イってるう♡♡」

びくびくっ！♡と腰がいつとう大きく跳ねる。

勢いでアルトの手が離れたあとも、いった気持ちよさで私の体はしばらくびりびり♡びくびく♡と反応を続けていた。

「はあ……はあ……♡ん……あ♡」

余韻に震える私の耳に、アルトの舌がねっとりとまとわりつく。

(いったばっかりなのに……♡頭犯されてる気分……♡♡)

ちゅう♡じゅるっ♡と耳元で鳴る水音に、思わず声が漏れた。

それに気づいたアルトが、耳を舐めながら、甘い声でささやく。

「そろそろ欲しくなってきたでしょう？ 僕のこと脱がせてくれますか？」

そう言うやいなや、アルトは私の膝に手をかけてぐっと外側に開いた。

少しでも体を隠そうとして内股になっていた膝は、強い力で簡単に開いてしま
う。さっきまでいじめられてビンビンに大きくなったクリトリスと、びちよび
ちよのおまんこがむき出しになった。

(やらしいところ見られるの、いやなのに……♡でも、アルトも興奮してる♡)

アルトは膝立ちになって、私の足の間に体をぐっとねじ込む。

その股間は明らかに窮屈そうに膨らんでいた。それを私に見せつけるように、腰をゆらゆらと前後させる。

「ほら、見てください。リリア様の可愛い姿を見てたら、苦しくなってきたかもしれません……♡」

「は、♡でもこれ、とってくれなきゃ、」

熱い息を吐いて、私はガチャガチャと手錠を鳴らす。脱がせようにも、手が拘束されていて何もできないのだ。

私の抵抗を前に、アルトはうっとりした顔で笑う。

「腕じゃなくて、上手に足を使ってみてください」

「え……♡」

無茶振りにすらどきりと胸が高鳴る。

(脱がせたらどんなことされちゃうんだろ♡アルトのおちんちん……はやく♡♡)

足をあげてアルトのズボンに引っ掛け、ずりずりと引っ張ってずらそうとする。しかしベルトとシャツが引っかかっていて、足ではうまく下ろせない。

両足をもぞもぞと動かしてどうにか引っ掛かりを解こうとするが、どうしても集中できなかった。

(だめ……この体勢、おまんこ見せつけてるみたい……♡)

意識すると体が熱くなる。アルトに向かって自分からはしたないところを見せつけているようで、気が気ではなかった。

「何考えごとしてるんですか？早く♡」

「ひゃあ♡♡だめ♡♡♡」

じれったそうにしたアルトの膝が、前に出てきて私の股間をもぞもぞとまさぐる。硬いズボンの生地がさつきイカされたばかりの陰核をくすぐって、私の体はびくん♡と跳ねた。

せっかく少し下ろせていたズボンが、つま先に引っかかって元の位置まで戻ってしまう。

（早く終わらせたいのにい……っ♡アルトのズボンにおまんこ擦り付けちゃって♡♡愛液がスタンプみたいについてていやらしくて、こんなのダメなのに♡♡）

っうっ……♡とおまんこから離れていくズボンに愛液の糸が引く。

アルトはそれを手ですくいにとって、ぺろっと見せつけるように舐めとった。

「甘……♡」

「言わないで、恥ずかしい……♡」

羞恥をごまかすように足を懸命に動かす。なんとかベルトの引っ掛かりを解くことができて、アルトのズボンは膝まではらりと落ちた。

アルトが何か言う前に、私はパンツにも足の親指を引っ掛ける。ずりつと勢いよく下まで引っ張ると、大きくなったアルトのおちんちんがぼろん♡とあらわになった。

「やった……!!♡」

達成感で小さく呟いた私に、アルトはからかうようにくすくす笑う。

「そんなにおちんぽが欲しかったんですか？」

「ちがっ……あ♡」

アルトは途中まで脱げたズボンとパンツを自分で脱ぎ去って、私の顔の前にま

たがる。

パンパンに膨らんだおちんちんの影が私の顔にかぶる。ビキビキと走る血管まで見えて、私は言葉をなくす。

(男の人の匂い濃すぎるっ……♡こんなにおっきいの挿れられたら……♡♡)

ふーっ、ふーっ♡とつい荒い息をする。目の前にあるアルトの欲望から目を離せなかった。

アルトはそのまま腰を進めて、私の頬にぺち♡とおちんちんを押しつけてくる。

「舐めてください。上手にできたらご褒美あげます」

「ごほうび……♡んむっ、ちゅう♡」

唇を突き出して、言われたとおりアルトのおちんちんにしゃぶりつく。手を使えないし頭の可動域も狭いので、なんとか舌や唇で捉えるしかない。

顔のそばにあるアルトのおちんちんを追いかけて舌を伸ばしていると、アルトはわざとらしく腰を左右に動かす。

（意地悪されてる♡私いますっごく下品な顔してるのにな♡）

突き出した舌の上に唾液が溜まってくる。あふれた唾液を顎まで伝わせながら、なんとかアルトのおちんちんにじゅうっ♡と吸い付いた。

「……っく………何これ、エロすぎ……♡」

「んふっ♡あ♡ふうっ♡♡」

口の端から唾液を溢れさせながら、じゅぽ♡じゅぽ♡と頭を動かしてアルトの肉棒をしゃぶる。

うまく口を閉じられなくて、息が声になって漏れてしまう。

「上手です、リリアさま♡」

「うんっ♡」

空いている手で頭を撫でられて、幸福感が脳内を満たす。

舌で裏筋をちろちろ♡と舐めると、ただでさえ大きいアルトのおちんちんが口の中でもっと質量を増した。

「あー、出るっ、ベロやっば♡」

「うふっ♡これすき？♡」

できるだけ舌を伸ばしてべろっ♡とカリ首を舐め上げたあと、唇を閉じておちんちんの先っぽをちゅっ♡と吸い上げる。

熱心にアルトの昂ぶりを味わう私の動きに、我慢が聞かなくなった彼は私の頭を大きな手でわしづかみにする。

「はあっ、はあ……出るっ、出しますよっ♡」

ずりゅん♡と口からおちんちんが引き抜かれる。次の瞬間、私の視界に白濁がびゅっ♡と飛び散った。

（アルトのせーし、あっつい♡それにすごい匂い……♡）

鼻先から頬にかけてべたりとザーメンをかけられて、鼻腔がアルトの匂いで満たされる。濃い男の人の匂いが、そのままアルトの興奮を表しているようでドキドキした。

頬についた白濁を、興味本位でぺろりと舐めてみる。どろりとした濃厚な精子の味にごくりと喉が鳴る。

「ふふ、おいしかったですか？」

アルトは腰を私の顔から離して、体の場所を変える。

投げ出していた私の足を掴んで、膝を曲げさせる。股を割られてぱっ♡と大事などころを開かれた。

「ちんぼしゃぶっただけで、さっきより濡れちゃってますね♡えっちなリアさま♡」

「だってアルトがあ♡」

「僕がなに？」

（アルトが興奮してたから気持ちよかった、なんて言えない……♡♡でも本当にアソコびしょびしょに濡れちゃってるの、自分でもわかる♡）

目を逸らす私の反応を見てアルトは口の端をあげて楽しそうに笑った。

「だけど、こんなに濡れてたら待ちきれないでしょう？」

「うん……♡」

「ご褒美、あげないですね♡」

「あっ♡きたあ♡」

（きた、アルトの太い指……！♡♡ おまんこつぶつぶ♡ つてされちゃって
るっ！♡♡）

ぐしょぐしょに濡れたおまんこの浅いところを、くちゅ♡と押される。一箇所
だけ、触られる強さは変わらないのに、あきらかにびりびり♡と強い快感の走
る場所があった。

「んあっ!?♡ いまのだめっ♡♡」

「あーあ、気持ちいいとこ見つかったちゃいましたね？ G スポットって言うんです
よ、ここ♡」

「jeeすぽっとお♡ きもちいい♡」

——すり♡すり♡ぬちゅ♡ぐちゅ♡

「あっっ!?!♡ダメダメまって、あ~~~~っ♡♡」

(腰動いちゃう♡♡指にGスポット押しつけてアルトの指でオナニーしちゃってるっ♡♡どんどん気持ちよくなって頭回らないのに~~~~♡♡♡)

「もうこれなら入りそうだな……」

私の姿を見てアルトが何か呟いたと思ったら、ナカをかきまぜていた指がずりどけていく。

「んっ……んうう……」

突然気持ちいいのが終わって、私の喉からは無意識に切ない声が漏れた。

ねだるように腰を揺らしていると、硬いものがぴと♡と入り口に押し当てられる。

(指抜いたのこのためだったんだ♡アルトも早く挿れたくなっちゃったんだ……
♡♡おっきいのきて壊されちゃうんだあ♡♡)

「あるとっ♡はやくうっ♡♡」

「お望み通り挿れてあげますよ♡」

「あゝ♡♡ナカひらいちゃううっ♡♡」

まだ指一本しか受け入れていなかったおまんこが、めりめり♡と押し広げられる。

「奥まで広げてあげる♡ナカで僕のかたち覚えてくださいね♡」

「うんっ♡あっ♡かたちかえてっ♡♡」

「かわいすぎ……我慢できないっ♡」

どちゅんっ♡と腰を掴まれて逃げられないようにしたうえで、奥を突かれる。おまんこの入り口の肉がずりゅ♡とめくれてアルトのおちんちに吸い付いている。

（あ♡私いますっ♡い顔しちゃってる♡頭びりびりっして口閉じれない♡♡まだ入ってきただけなのにくっ♡♡）

「あれ？もしかして挿れただけでイっちゃいました？」

「わかんなっ……あたま、こわれる……♡♡」

甘い痺れが体の奥からじゅわ♡と湧き上がってきて、力が抜ける。ナカのひだがうねって、アルトのおちんちに吸い付いているのがわかった。

(甘イキしてる……っ!?♡アルトのおちんちん、ほんとにかたち全部覚えちゃう♡♡血管とかカリ首の位置まで、全部おまんこで覚えようとしちゃってるっ♡♡)

「あー……すっご、本当にイったんだ？リリア様本当にエッチですね。おちんぽ大好きで淫乱のリリア様♡」

「ちがっ♡♡ちがうのにいっ♡」

ゆら……ゆら……♡とアルトの腰が抽送を再開する。

おまんこの奥でぎゅうぎゅうと締めつけられたアルトのおちんちんは、挿れたときよりもずっと大きくなっている。凶悪なカリ首が前後するたびにナカの肉壁がごりゅっ♡ずりゅっ♡とえぐられる。

「あゝ♡♡はあゝっ♡♡」

完全に目をハートにして、口を半開きにしたまま私は腰をゆらゆらと突き出す。

「言ってみて？ おちんぽ大好きですって。アルトのおちんぽ大好き♡って、それならもっと深くイかせてあげる♡」

「あっ♡ あるとのおちんぽ♡ だいすき♡♡ すごいほしいっ！♡♡」
「っそこまで煽れとは言っていない……！」

アルトの両手が本気の力で私の腰をベッドに押し付ける。その圧迫感すら気持ちいい。

どちゅんっ♡ っ奥の奥の届いちゃいけないところまで、アルトのおちんちんがすごい質量でうがってくる。

「んあっ!?!♡♡ おく、奥きてりゅっ!!♡♡♡♡」

「奥キッツ……!! リリア様、ここに俺のおいしいザーメン注いであげますからね！」

「んぐ♡♡♡せーしほじい♡♡♡♡」

ごりゅっ♡どちゅぐちゅっ♡♡といやらしい水音が響きわたる。

一突きされるたびに頭にびりびり♡と電流が走って目の前に星が散った。

（もうっ……わかんない♡♡♡ずっとイってるみたいに♡アルトのおちんぽナ
カで押しつぶしてる♡♡♡♡）

きゅう♡きゅうっ♡と膣の中が波打ってアルトの精子を搾り取ろうとしている。
る。

いきっぱなしの私の体に、アルトは容赦無く腰を打ち付け続ける。

——ばちゅん♡ばちゅん♡ばちゅん♡

「あっ♡んおっ♡♡♡」

「出る、出します、リリア様っ♡」

「んううっ♡♡♡」

アルトのおちんぽが私の子宮の入り口にぢゅうつ♡と張り付く。

そこにドピュルっ♡♡と精子を注がれて、私の体は喜びのあまりびくびくっ♡と痙攣した。

「はあっ♡ふーっ♡おく、すごいっ……っ♡」

子種を奥に押し込むように、アルトの腰が数回前後した。

絶頂の余韻とともに、私の頭をぴりぴりと痺れさせる。頭の中で、快楽が分泌される感覚がわかるみたいだった。

肩で息をする私の乱れた髪を、アルトが優しい手つきで撫でる。

「んう……♡」

「かわいい、俺のリリア様……♡一緒に帰ろっか？♡」

「うん……♡♡」

アルトのおちんちんが私のおまんこからずりっ……と抜けていく。
代わりにアルトの顔が近づいてくる。

（キス、される——でも、アルトなら……）

目を閉じて、私は降ってくる唇を受け入れた。